

令和4年度中に、

特色・魅力ある教育の

実現に向けた指針として、

各高校において

「スクール・ポリシー」の

策定・公表に取り組むことが

求められています。

作った後に
どう運用していくのか、
具体的なことは未定…

方向性が明確になることで、
一貫した指導が行える

誰がどう策定していけば
いいのだろう

どんな効果があるのか、
よくわからない

教職員や生徒が
同じ目標をもてる

ただの「絵に描いた餅」に
なるのでは？

形骸化する可能性が高い

現場の先生方は 「スクール・ポリシー」を どう考える？

内部にも外部にも
浸透していない

理想と現実の
ギャップが大きい

新しい仕事が増えて
大変

受験生が
高校を選ぶ目安になり、
入学後のミスマッチが減らせる

多様な生徒がいるので
方向性がまとまらない

これまで口伝されていたものが
明文化・言語化される

言葉遊びのようになって、
伝えたいことが表現しにくい

令和4年度中に、策定・公表が求められているスクール・ポリシー。

今、学校が置かれている環境はそれぞれ異なり、先生方が多くの課題に取り組みなくてはならない状況にあるなかで、言葉を紡ぎ、学校の向かう姿を一つの表現へと編んでいく行為は、さぞかし「筋縄ではいかないことだと拝察いたします。

しかしながら、そうして生み出された言葉が、

一部の方にとつての指針にとどまらず、

先生・生徒・保護者・地域住民など、学校に関わる人たち

「みんなのもの」になれるとしたら——？

少し立ち止まり、この行為の意味や、言葉の手繰り寄せ方など

さまざまな視点や実例から深めて、考えてみたいと思いました。

言葉を「みんなのもの」にする過程で

立場を越えて、学校のあり方を考えることはできるか。

言葉は灯台のように、多様な人たちを未来へと導くものとなるのか。

スクール・ポリシー策定にあたって、進め方や普及活動など

学校によってそれぞれご事情は異なることでしょうか。

その進捗状況にかかわらず、今後のあり方を考えるうえで

ヒントになるような誌面構成を心掛けました。

本特集が少しでも先生方のお役に立てば幸いです。

赤土豪一（本誌編集長）

特集

スクール・ポリシーを どう「みんなのもの」に していくか

